信濃奇區一覽

九

ル 4
1686
5

門ル名4
1686
5止

極文庫

信濃奇區一覽卷之五目録

埴科郡之部

岩端螢　圓盡卓祇
兩宮猊踊　山鳴
御安紅梅　野茂利
土鑵子

更科郡之部

姨捨山　白鳥山什貲
古器物　石川玉髓
古戰場　バカ火
　　醫宛熊
　　同玉石

高井郡之部

保科　墨坂三石
　　松皮琴裏

謙修堂

一目髑髏　米子瀑布　飯盛松
奥縫塔　荒井河原　彌勒石
雌垂雄垂　小菅　神戸銀杏
凹石　獅子石　秋山
山鱸

東京都立中央図書館蔵

信濃奇區一覽卷之五

埴科郡之部

井出道貞輯

岩端螢

岩端ハ塩尻の下嵐村の上北陸道への往還にて路の傍に崩落る岩石數〻有又岩根の崩て今ゝも落ぬへきさまなるもあれいと怠て恐ろしきなり　盛衰記に塩尻狹間と有ハ此地なるへし　此地西山の狹間にて上古千隈河の水此に湛て佐久小縣ハ海なりしと云伝ふ　三郡の堺にて上ハ小縣より流れ隨て埴科西ハ此より更科より千隈の河原東ハより西へつゞきて碧〻たる流あれハ河を傳て郡の接〻ハ三郡畠とハ呼なり此地風の吹廻しにて螢の集る伝ふ殊に毎年五月夏至を過て迄ハ何方よりか別て螢の多く処なるが皆こゝに集つどひ来て群をなす故に右の方に常なりて又西なりて鞠のごとく多の光揚て後ハ地に

岩端名所
半過村
千曲川

藤ながり中なる流水を為て流るゝ小月もやなり如形もなり三夜ありて止愛
翫する人多し

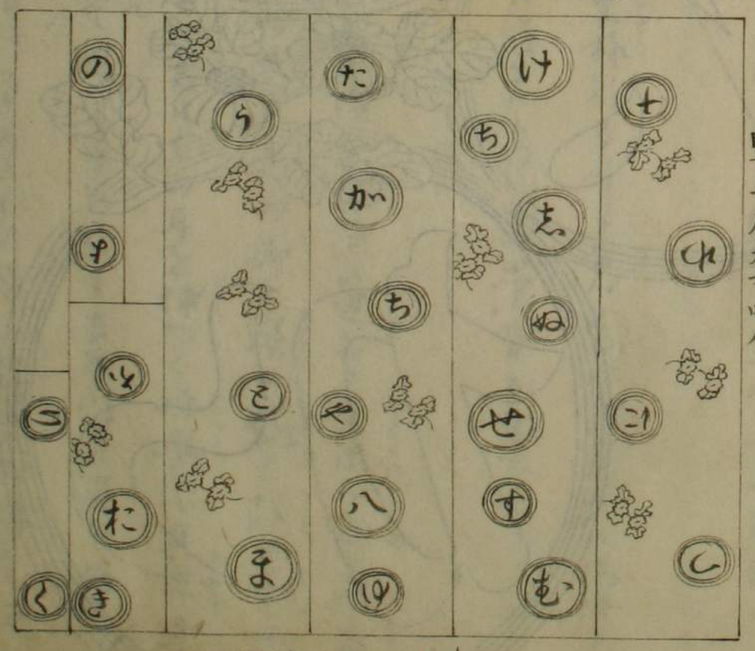
圓盡卓欲

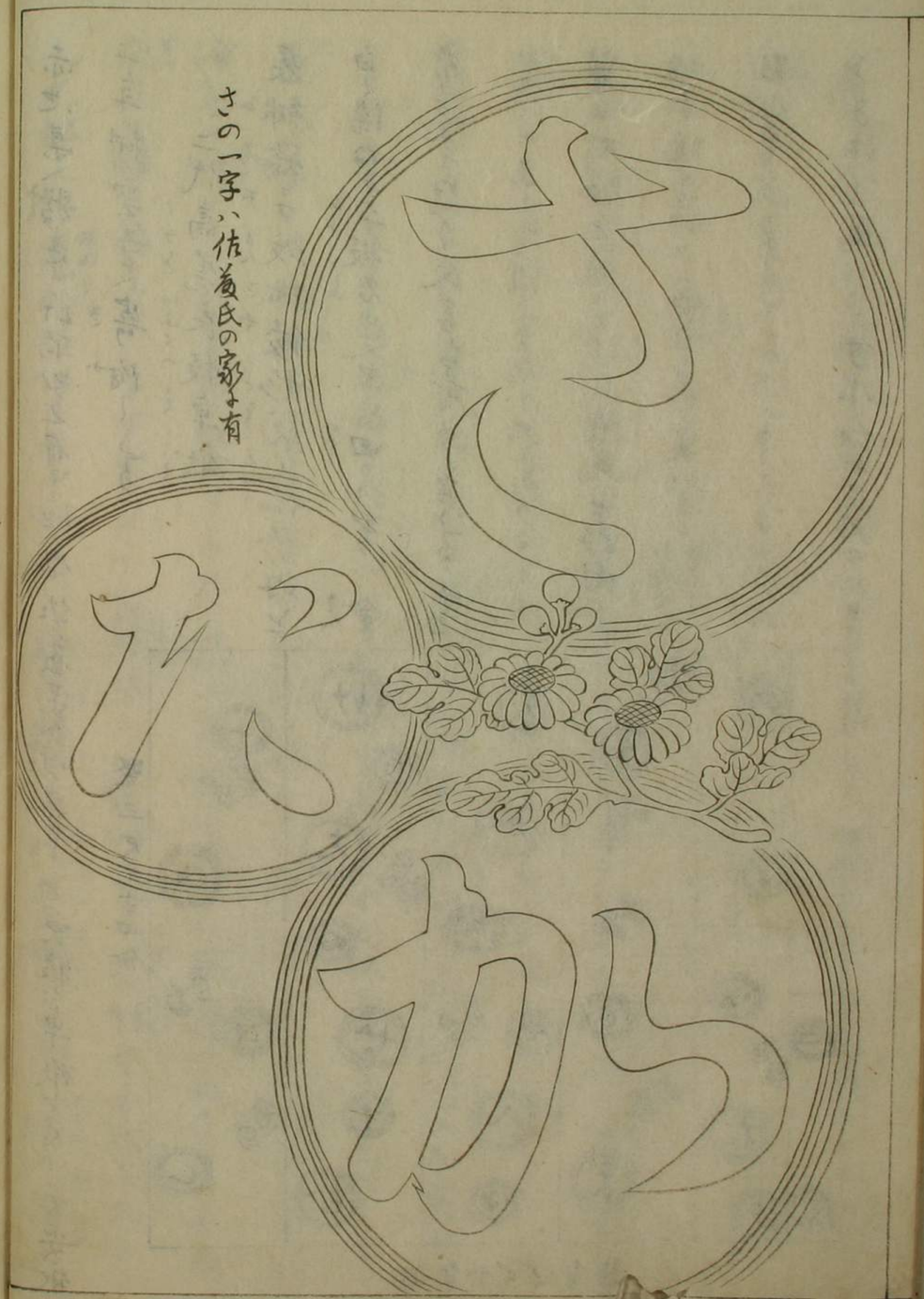
龍田山耕雲寺ハ往古横尾村にあり今其基址を留るして寺屋敷と称此地玄古
烟艸の名産ふり玄古より造作り初しゝ其名あり瓶村の堺を連て移せしゝ瓶
の耕雲寺を結ん東武新吉原京町一丁目三浦屋の名妓高尾の被服のお妻あり
る雄吉系を出る付妹妓の筆を以て遺品を贈ていぞ知此筆ハ瓶村なる
農夫のもとて幼名をてるゝ云しが容貌人に勝れる故小計らひも自らなれて三
浦屋の許よりゝれ高尾の妹妓となり後に筆を授かる或方に脱籍されて其主人
逝去の後元禄年中にうす雪死て法華寺人東都に遺物ハ唐風鏡一面墨樋筒等ハ債の償に
赤池氏へ贈まつり此京四之有て墨佐為氏方へ有しと衣裳ハ卓欲なりして安永
二年耕雲寺へ寄附しゝ

二代高尾衣服卓欲

表紬綸子紋紗鈕形総文様九の内と
白く染ぬき平假名の文字有四りの字ハ金
糸とまてぬ〻り文字ハ墨もて写る也と
いろ〻の糸まて縫ふ九ハ少ありさま〻
第の折枝と縫ふ二代高尾ハ下野国下
塩系塩釜村の産まて父と長助と云
数代のうちまれて名妓のきこゆるしゝ
を万治元年十二月廿五日

竪三尺九寸四分





さの一字ハ佐義氏の家ニ有

死或云万治二年十二月五日死ス云尾の名十一代まてなてらスしり十一代宮尾寛保元年
出郭を後る尾ふ〻と迫世奇跡考ニ云ハ
を近年ゆりあるの再興ス云ス　宝暦六年家絶ス
万治寛文の以女の衣伝ニ尾ヲの文様行それ〻とん色ともてそれの風俗をお
もつハ人の風俗ニてる百有余年の後ニハかつくふ景ゆゆ有へし

野茂利

宝暦の初中之条村の吉左衛門と云者夏の頃十隈河の辺る支流を越る時ニ忽
物あり水中ニ出て矢の如くに光あり的然として両御ニ纏ひ蠕て眼を挙口と
張目を瞋し牙ニ喰を噉ん上す吉左ヱ門急ニ之を西耳を挿つく呼號ぶ其辺あく
斬草男子鎌を揺池ニ落ス〻ハ怖て迫つくるを見す吉左ヱ門其鎌を借ルハ
振上て投ス走て鎌を取ス〻ハ行るあるをんこ〻ふ一公国の柳樹あり地を

擢るの一尺許を利恰鉾及の如し即て頭と株と共人として従容として時
を待て漸まらんと欲す解却して逃去其長五尺ばかり背は鈍黒にして腹は朱
の如し四足有て龍般魚に似たり此物奥方に吉左門が身に移り奥方年
を経ても失せざりしとぞ

一説に野蔵利と云物ありと云こは竜般魚に守宮の文字有りて名付たるか

雨宮猟踊

雨宮山王の神夏は相傳往古雨宮楊津に清野山城に有家の姫ちなて其頃
の風俗なりや例あり四月申の日三月八日中甚古雅なる神なり先ずの前日別神あるて榊の
踊ありて森村の禅遺院に行此寺は雨宮清野の氏の木主あるゆえなり森舎科
生萱雨夏の四村は古例なれて旧家なる面てをどる翌日は朝まだきに神幸あり是榊乃
踊あり夫より松代より海津堀内より入て踊る是は清野氏のやき如くして由緒ある

ちなに二三所なり清野の家やき踊り又岩聖土口家の旧家なりて踊る是て踊
家八神居と迄あり家なる還りて神輿を舁て家の下に安置し神主の人数前よりひ
舁る申の刻に矢代の山家の神輿雨夏の表迄を通り熊雲固の武者甲冑馬上にて
道傍の一石を射る（武者出家の方一人一ツ宛ある紙法なる山家の尾先一所を三年八年に生田の家の年八家の家なり）諸家の
幸崎州神の神輿なるとて神主を本都にてなん神輿八家家、還るに熊雲固乃
武者神主二人五騎と号る家家馬を地て通るなりて家の神輿祢端の濱
各の榜を立榜の上に家重柳の家の彩小燭燭を立榜の四方に下て濱り柳の彩の紙と
雨て川へなげれなれりなく海の神の神なるなりて神主を本都例のなくをとりて
久う神輿を本社のまに安置皆く踊りなく三反廻りて平敷に結ぶなり
一人数を引なるなり

矛物二人　行事六人　社官司六人　左大人六人
猟踊人数午昏なれに

左末 正相六人　右上 飯縄六人　右中 供正相六人　右末 右大人六人

兒踊八人　鍬持二人　左上 宝珠獅子六人　左末 陽獅子六人

右上 陰獅子六人　右末 陽獅子六人　唄揚十人　笛吹十人

大鼓六人　注連張二人　輿附鏡研八人　幟立八人

武者六人　武者六人　松代踊案内二人　矢代迎六人

矢代駕輿一四人　花笠張二人　獅子張四人　御城内踊案内十人

下駄持一人　團扇張一人　弓持一人　長刀持一人

輿附一人　四箇村警固八人　鳥居前警固二十五人

同踊唄

一みたき天ゝ。精進のお坂伝連。引やひく。七宝ゝ八重ゝ。そゝぬてそひく。

一川きゝの。根ゝろの柳。あゝちんて。いゝや若の。枕さゝちん。

一江の浦ハ。いろゝる神の。松ゝそ。海ゝ路の。流れさりゝ。

一をゝ江の。濱名の塔の。下形ハ。潮や舟ゝ。やくこぎそゝ。

一あれをゝよ。ゝれをゝよ。つゝまの沖ゝ。漕ゝ舟ハ海ゝ。こゝで。あゝそゝで。

小おろゝ

一ゝ弱ゝ。ゝれハ。中ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

猩踊畧圖

地獄谷の清水ハ、ゆるぎのするとき、稲三石三斗米あり。からのするときのとき、

但神あるときハ山王社の清水前より唱清領主の前まで、地獄谷の清水前と唱ふ

これをもつて細ふかゝのみなぎるといふ。みくらの文をあげて。依つまふ。

秋の日の。くもりけりハ下葉ふるる。霜ふる神ハぬれよりう

山鳴

清野村の山上に古墳あり。倉科の地にして鞍骨の城と云天文の比倉科左衛門尉これを

據る此城近年完りて。徑四五寸深きこと窺ふべからず。辺卯色天為隆

とまるとき山鳴ることあり其音遠く響て雷霆のごとく如しいふるときと

いふものとまつに影ふらくハ氏宮より雷と發するとき〻地不安をなす少

雷といふ事地動ハ鳴ことをうしてり

大明一統志曰山西平陽府鳴山每天欲雨則此山飄然有声又曰

福建興化府有鳴山山頂有風穴天將雨則鳴其声隱然若雷

怪異兵断曰山鳴ハ地中舊気の所為也地中ハ空穴なて舊気吹發

するに因て声をふくもあり又土地の德殷陽衰ふく鬱伏の気常に有て

陰気と搏て鳴ことあり雨天に必有声ハ土中の鬱伏の気雨の陰気に

感発されハこれ怪なれ怪ハあらしこと

土罐子

寛永の比松代の先侯千隈川にて土罐子を細をいとひしに土焼もて固のごとく社

物網に掛て揚りて見を藩中の於木氏に頒ひ〻いるる物名状

すべからしハ名つけて土罐子と呼ぶ於木氏園中の小祠に納奉て

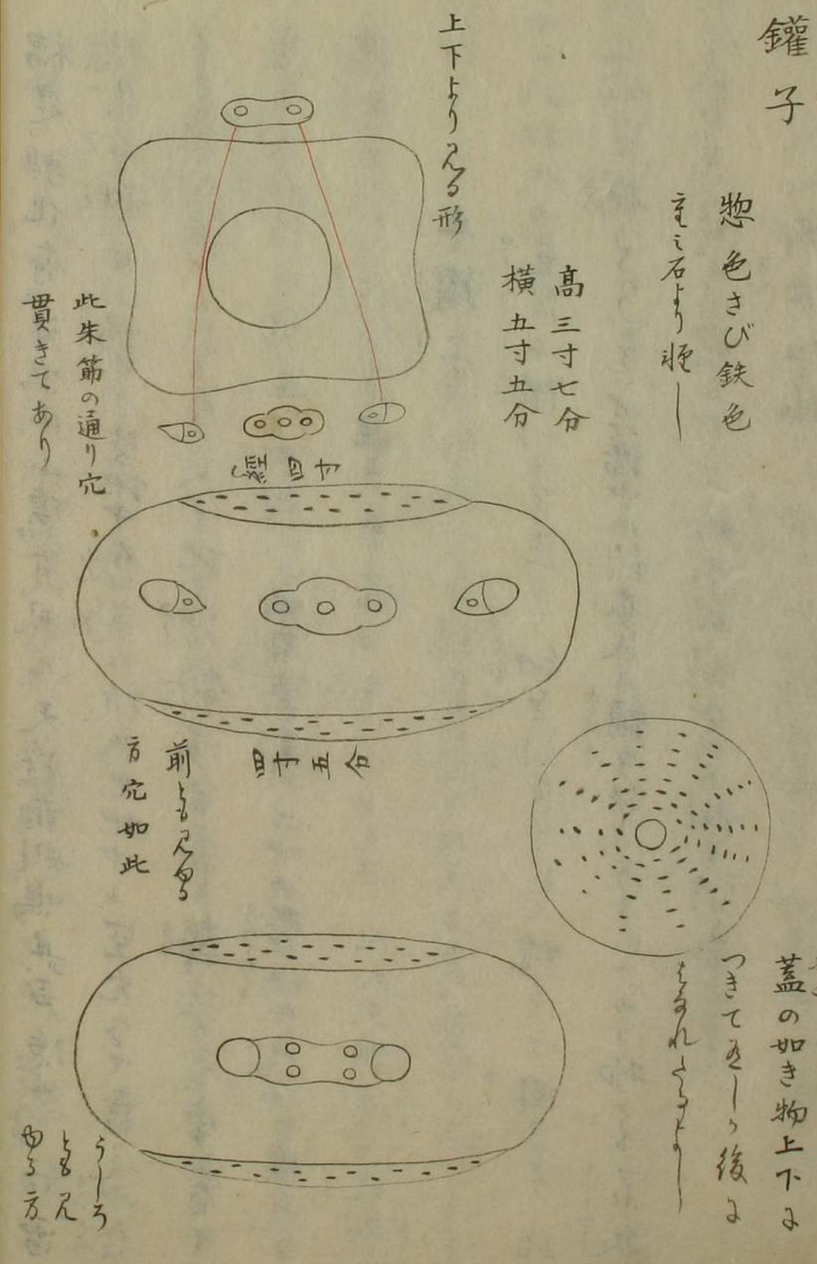
御安紅梅

松代の東につきて西安屋敷と云ふ所あり。町の入口を出安口と云里諺なこハ

土鑵子

惣色さび鉄色

高三寸七分
横五寸五分



奇品奇名状

重二百七十五匁

嘉永改元九月二十日觀
与此圖不相似仍謂此圖非
親視者所作也 信敬

慨妖のゝ作くは仏仏の女の懐ゆゑ
あハんまあるゝ月日を送りるゝ
と唱へしゝ山梅実を結ぶ
詠も身のうゝ思ひ
うゝゝゝ山法え年頃朝ゝ
別荘とかまく国ゝ世と送りしゝ
まゝも花ハ昔のあるゝ
ぐてを語とハ法安国安とゝ

り建久八年四月右大将頼朝御帰善光
坂寺阿安といふる息女を召て渇しゝる
ゝて碎安妾ゝ行ふまゝ人改めの前ハ
ゝ和させゝふをいふゝを吟て仏安の
ゝ梅の咲る枝ゝて実をゝ結びそ
ゝ遊女久万乃が郎の花をゝれゝ
ゝ一向ゝ梅をゝ屋
ゝ法津の東南ゝ
ゝ根梅ゝるゝ後
ゝ仏安和梅ゝ
ゝ年後ゝ
ゝ梅ゝ

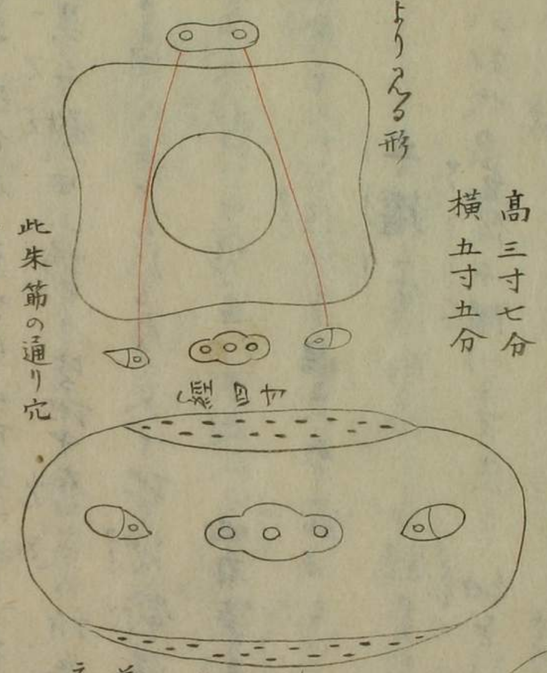
土鑵子

惣色さび鉄色

きゝ石より粗し

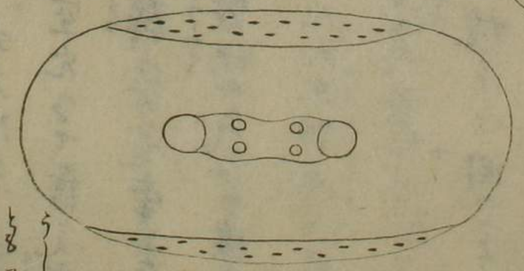
高三寸七分
横五寸五分

上下より見る形

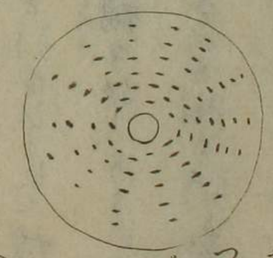


此朱筋の通り穴
貫きてあり

前より見る
方穴如此



蓋の如き物上下よ
つきてゑしの後よ



昔天象元年歳の次己卯星ふりあり建久八年四月右大将頼朝御願善光
寺を造りはじめ給ひし時彼仏菩提を弔ハんと堀宮阿安と云る息女を設て遣しける
此女容色美麗かりしかハ右大将鎌倉へ召して磯安妻とし給ふ其人政子の前
嫉妬の心深く此例仏の女の懐妊のあれハ人を頼ませ給ふを聞て仏安の
あハれまれなる此月日を送りもなく産をなし梅の咲る頃産て実を結びそ
と唱へしかハ此実を結ぶと云り彼遊女久万乃が郎の花を尋れば
詠も身のうき思ひ出てあく只故郷の軒の梅を見そしく一向に嫉を忘る磯
うゝゝゝ山法え年頼朝公薨しかハ此法の東南に
別荘をかまへ閑に世を送りしかや又一株を根株ともき後
まゝ花ハ昔のあるじ忘れぬ此安如梅を世伝へ千年を経たま
ぐてを訪とハ此安石梅を尋ぶとやし梅を見るの

石梅ありハ色濃くして黄ホあるハ花のせく今茂実ハ落ぶれハ
枝を接て今諸国ハ殖ごりて法安仏梅多くあるものハ山梅の枝の
分殖しなるあり

洲地ハ今播磨立田氏の家ありて梅林と号ス古梅ハいつの枯ずして若ホ
のこりハ此の東皆神山ハ熊野権現の祠ハ主田百余石別当修験和合院
山麓ハ老梅あり多数行亦の墓ハ東条ハありて石の五輪ずく並ぶり又
ハ安倍家の南荒町村の上ハ法あほおの寺護仏ハ梅の観るとこあり
別当修験紅梅山梅寿院浄安寺と云
梅ハ孔明々者光ハ詩の中東郡ハ楊ハ見聞私記ハ載ると云
山書ハ詩ハ志ごし彼地類明山十念寺又ハ北朝ハ所行或ハ中の所不堅の
紀多ハ四詩ハ云所ハあれハ法諸の説しハありてかり屋の海ハ

更級郡之部

姨捨山

姨捨山ハ更級郡ありハ更科山更科の星更科川ハ月ハ名ハ歌ハ所ハ
古今集の云ハ姨捨ハ月ハ名ハ歌ハ所ハ
のハ山ハ人和物語ハ信濃ハ更科ハ男住りあき時ハ月ハ名ハ
姨捨ハ記ハ姨捨ハ山ハ姨捨ハ山ハ姨捨ハ山

[illegible]て[illegible]又いまて遠近てあるうとかうつてり　猶要

顯昭神中抄後拾遺無作抄ハ和哥ハ人のめいとゝ

或人の考よりすて姨すく[illegible]ある[illegible]すてハ下部よりつゝ葬地を云

名光の信濃漫録ハ下部ハ美濃五の巻の古日ゝ死とゝ[illegible]ゝ多

敬の使於北ハ[illegible]ゝ地ゝ黄泉を云ゝ[illegible]ゝを[illegible]ハてと

ゝをもてをすて山ゝハ[illegible]ゝ如[illegible]ハ鳥ハ姨を葬ゝ[illegible]

月の沈ゝ[illegible]ゝて昔を志のひ[illegible]ゝ衰れ[illegible]ゝ哀ゆゝ[illegible]

布和物語ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

姨捨山
富小路正三位貞直卿
二重山
碑面句
宗祇
月見堂
清月殿
田毎月
冠山
姨捨山
姨石
桂木
室ヵ池
御ヶ吉川
白髭ヶ塚
字祇ヶ塚
ハゼヶ塚
霊井ヶ

今ル仲秋ニハ諸方より騒人風客此地ニ杖を曳姉石のごとく集ひて詩歌俳諧ニ風情をのゝ絶叡月を賞ずるゆ毎年ニて許多の小車ニ積ハ牛ニ汗をしぼ

殿門人宛能

ここハ神宮寺の文庫ニ納む

八幡の里ニ原田見智と云醫師あり平生貧をあまんじて妻ニ有女子一人あれとも是ハ足しく三間の茅屋形端ハ地ニつく許なるゆ一ツの戸口をあけ土間ニ敷ふ蓆ニ人寄也ハ一枚の菰蓆を志く火地炉ハ土を穴ゆ炉縁ハ竹ニ家ニ妹ハ揩一ツのみて湯ニ入れハ水を香朝夕の食物ハ合器ニ椀ニて埴ニ盛ると初ハ漆色なるゆ次ハ白布のまくに剃て名智とそ呼ぶ人ハ全然ニて仏ハ出るき通ニ痛ハ招れ行ときハ糠の俵をそ負ふ貧ニて乏しきゆ乱材の公菴たまく訊行く談論ニて記ときゆハ不用の冊紙を表裏ニて反の紙ニと穴ゆ墨ニ柳枝を噛て筆ニ記ニとふ如新ル負しきハ如何ゆ故ニ最ニ

此前ニ書とゆもの多を好こて切ル所の金ハ三ル書籍ニ費ル五ニ書ニ多頭さハ十疋ニ餘りぬへ一ニ償の金ハ二百金作ル及ハ一ツの土庫あり一人ニ住ハ

ゆ之ニ其中ニ書と巻ニ方ニ切ル新客ニ遭ハ人皆貧能ニ

綿ニ切ル本州ニ家ニて家の田の畠ニハ茶蔬ハ植ずて茶竹のこり竹ハ舟流ニ

る妻ニ多ゆ之ニ想像ニ文政三年七十有余ニて終ニ

白鳥山什賢

白鳥山康樂寺（西流塩崎村ニ有）報恩院と号ハ刹基西佛法師ハ滋野親王の後孫滋野

小太郎幸親（信濃寺）の男弥平四郎幸廣の兄ニ初勧学院文章博士ニ義人通

廣ニ名つく出家して西乗坊信救と号ハ南都興福寺の学侶ニ治承四年

茂仁親王の令旨を奉て平家追討の返翰を書清盛ハ平家の塵芥武家ニ糟

糠ニ云句あり清盛後ニ之を聞く大ニ憤り殺ニと欲ニ信救遁て當国ニ

木曾義仲に仕て太夫坊覚明と号し義仲衰て後行列に隠又箱根山に塾居し建
久六年比叡山に出り慈鎮和尚の法席に列り名を浄覚と改む（一作浄覚）時範宴親鸞上人幼名
同寺に在嘗て範宴の性凡ならざると感して随従し比叡宴吉水に到り源空法然上人の
弟子となり名を綽空と改む浄覚亦相従く名を西仏と改む兼元元年帰京上人
綽空又名善信越後に謫せらるる貞永元年に赦免帰洛し其始終毎に陪従す文暦元年
師命を奉て信州に赴き法を説嘗て鳶飛の行状を記し浄賀に授く仁治二年
正月二十八日寂す時に年八十五歳鸞上人より年齢十六歳長じ
弟子西仏幸広に木曾義仲に属し寿永二年十月三日備中水島合戦の時副
将として平家の大将能登守教盛と為て戦ひ武功あり討死す
浄賀行状記に曰く覚如上人に呈す強国を加入すと請ふ如浄賀と関東北陸の旧跡を
巡り文仁三年修行成四軸有　興法眼浄賀（康楽寺二代）傳ハ本山三代覚如上人の筆

鸞上人遺物　羊裘束珠数　愚之杖　一節截　羅扇（其外什物多シ　西十六ラム）
法然上人色形像　一説火葬の灰を移して作る像なりと云
建暦二年上人八十歳にて迁化遺骸京都東山大谷に納む十五年の後南北嶺
の流後降紀して曰今天台止観の法水流をくして四海念仏門に帰する偏に
法然の故なり死骸を拝申し加茂川に流す法然上聖人平生の
御有定相と云者上人の選択集に彼文を書て深選択と名つけ上人の弟子隆
寛律師へ送る此僧引選択と云書を作り定相の雖仮と云法にて日汝が彼文に
中らざるか暗天の乱礫の如しと定相にて傍り三十坊の流後を引率し
建保二年六月廿三日大谷の廟に押ずる所の宮弘三郎が相伝実信房
二百余騎を率し為に迫付ル流を以て合戦ス
乃ち不北嶺の流後敗北に及ぶ夜墓を開き棺を浜成二条院へ移し奉る

永仁三年繪傳成ーより文化十一年迄
五百三十五年也　中の僧俗二人ハ次へつゞく
繪あり　透写有　故ふこゝに縮模す

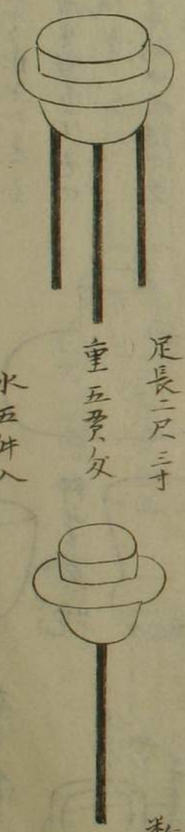
小川の流れあるところあるさまは太秦廣隆寺東辺坊に移り翌三月元誠の〻〻
廿五日栗生聖光明寺山に茶毘を付棺を開きたるに御顔変らず造顔
生るが如し見る人遠ざかる程に一度は像を写し刻ませ衣は彩る上人
生涯黒衣の外を着ざれば弟子中等教のあまり造顔は黒衣をかぶせ海を写
し給ふ故多形の面貌と稱し又仏像を造り奈良法隆寺都近き辺に安置
せる物は孝西仏法師八人の弟子のうち八山寺に送りて是八人目を忍
ひ夜〻供養して康樂寺に移せり形変しきは正法妙伐坊の九巻目録
詞伝四十三巻あり後鳥羽院時安置の年号文政十二年まで六百三年

日本一躰の像あり

古器物

河中浦の環の辺に沙地あり四名牛房菓荷の長るゝ他は稀なり中も葛葉顔

ふぐ地に入る深く穿れば掘るあり〻〻れを依て古物を掘出すあり数多あり
文化のころ信濃村の土中より陶器数百を掘出せり数は多くなれり
抹殊略記曰光孝天皇仁和三年七月廿日信濃国大山頽崩山河溢流六郡城廬
拂地漂流牛馬男女流死成丘〻〻千隈河六郡より其時の洪水は
埋土物なり



足三本長サ二尺余
重十四貫匁
水五斗入

足長二尺三寸
重五貫匁
水五斗入

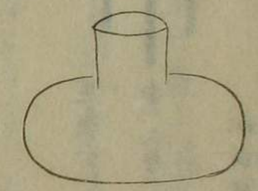
数五

缺口径
四寸二分

長一尺五寸

山器皿の如く枕の如く
轉ぶもの水を入まむ
直居ら白く所色の
石焼あり
外さや形中ゟ波の文
あり四方ともゟ花この
中立葵の形有只ら
けらり二ハ金ー
水五升を入

玉髓



何れも素焼

一尺六寸

一尺三寸

径四寸
二ト

是ハ油をへらす器なり
底ゟ油の垢くまるを
有ー

石川村の山中ゟ玉髓を生ずる地あり土中ゟ初るゝ所ゟ細ゝ文理ありて毬の如く蜂乃房のゝ数年ゟ経るに成ゝ次第ゟ大ゝ四尺余ゟ成り是を破るハ中ゟ種々の玉髓あり大ゝに奇なく小ゝゟ奇品ゟ成ることあり多一様なるゝ千変万化ゝり山諸方より人多く入こゝ所ゝ掘ゝ故ゟ地主より禁ゝて今ハ人の行こゝを止む

古銅器玉石

石川村の山ゟ出て将軍塚と稱する塚あり享保二年土人其塚を穿るゝ様々の玉石銅器出ゝ

九鏡二十七枚

矢の根十七挺

唐銅ゝ擬物の如ー
鐵色根四分一の如ー

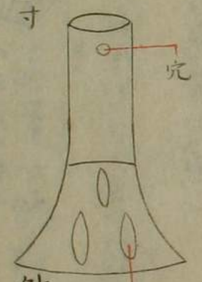
但裏の文様二十七品大小あり大なるハ
高麗文字同雲ゝ人の形五三人あり

長二寸斗
幅九分斗

込七分斗

此器二箇

口径一寸

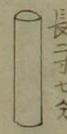


穴

穴三ツあるなり

外一箇ハ形ゝ別ー

長三寸五分



長二寸七分

此物内ゟ有振ハ鈴の
音有唐銅ゝて鐵色
四分一の如ー古代の鈴
なるー

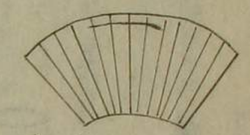
金銀鐶七ツ

但ー金銀着せ物なり
下地赤銅大小あり

数五合斗

此玉瑠璃色
びいとろ焼

青石



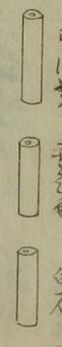
此両方行口筋まあり尻の地紙の如くきざあり乃小あり

径二寸

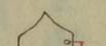
此所に穴あり向へ通る

高一寸三分　一箇

青石にて櫛の葉の如く平らなり



数三合斗　萌黄色石榴色　びいどろ焼



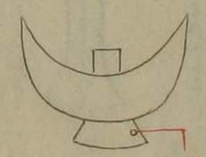
穴先へ通

数二箇　鍋石

此穴下へ不通

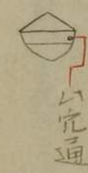
長二寸三分

数一箇形樹物の軸の如く石質堅く質蝋石の如し



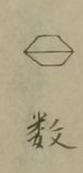
穴通り有

蝋石にて丸き同　一箇

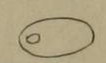


穴通

数三箇　水晶形六角なり



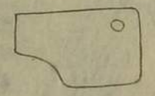
数三箇　練玉あり　くろく有



合化出

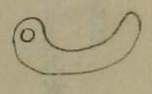
三ツ　切り玉　くろく

二ツ　青石厚二分斗　径一寸三分



二ツ　びいどろ焼の如く色薄るりの如

数二ツ　此曲玉萌黄の石又至て上品有すいとくるもあり



二寸斗

一　るりの曲玉

一　水晶

此外白瑪瑙赤めのう同薫陸萌黄玉青石の玉蝋石玉至て上品の玉有墓陸の外三十余石の塚穿る時其集る人塚の穿る跡と赤塚穿る時拾ひ物る者数不知とるん

河中嶋古戦場

河中嶋八埴科郡に属する井の口郷と直て続き名あり埴科郡西の宮と向ひて接田川あり昔木曾義仲と平家の家人戦ひの城今宮と合戦あり所なり

東鑑　元寿永元年十一月九日越後住人城四郎永用相従兄資元跡欲奉射源蒙仍今日木曾冠者義仲引率北陸道軍士等於信濃国筑摩河辺遂合戦及晩永用敗走

地蔵峠
妻女山
諏信
陣取跡
永禄中甲品勢カラ木堂ヨリノホル
赤沢
関ヶ
西條
皆神山
東条
海津城
田中
鳥井峠
寺尾
西寺尾
アニカザリ
牧島
貞
鎌倉山
寂明寺
二
岩野
信野
中沢
東ブクシ
杵フチ
水澤
キウジ
胴合ハシ
八ツ
此辺
八ツ原
上小嶋田
下小島田
大ツカ
三枚畠
網島
神明
廣田
下ヒカナ
青木ヒヘ
千ヶ川
森
埴科郡
矢代
雨宮
土口
上横田
下横田
小モリ
會村
篠ヶ井
御ヘイ川
布セ
島田
南原
北原
上氷鉋
合戦場
ト云有所
戸部
藤牧
中ヒガナ
諸角アジ
ハカ
此辺陳場
河原ト云
丹波島
屋川
小市
水内郡
更級郡
フセ五明
兼平山
切勝寺
今井
今里
四ツ屋
岡田
小松原
茶臼山
石川
長谷
観音
白鳥山
康樂寺
塩サキ
稲荷山
桑原
志川
八幡
姨ステ
合
松本道

甲陽軍鑑 武田代記ニ云ふ 永禄四年九月九日の夜甲斐勢川中嶋に押寄せ犀川より
一里東の方三枚畑越後の引口に備ると云ふ那より三枚畑ハ大塚に有て場所大に相違す
其時の戦ハ東福寺中沢より始り荒堀杵渕水沢辺大戦之夫より八幡原陣場河原別て
烈しき大戦なり 陣場の原ハ中氷絶より八幡原迄十七八丁あり 信玄の家来武田典厩信繁
典厩ハ左馬右るめ唐名なり 信繁ハ左るめ右ハ典厩と云 の古墳水沢村にあり 典厩寺境内西の方に石碑と立左右に松と
植あり 嚴と少義しるる所と云
駿豆雑記に云武田信繁其子と誠られし條子孫の物と云伝へに云て崇敬
篤実の人なり 云々 云風清前古人に恥ざる人云々
此寺元来瑠璃光山鶴巣寺と真言の寺なりしを悉荒壊に及ひ其代の長国寺
五代目の住職大義和尚修補して信繁の法名松操院鶴山巣月大居士の牌と五
曹洞の宗流なりて松操山典厩寺と改む 氷絶村小海田村の間塔の腰と云ふに諸名用

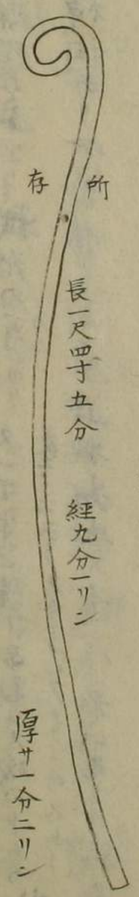
ふ法寿昌清の塚あり此地に於ハ戦死の所なり 又一丁北に陽て五輪の石碑あり 小嶋
田より水沢の間に八幡の神祠あり此辺八幡原と云ふ 墓と云あり
首と胴とを合葬る故胴合の塔と云土塔あり
山本が家に大仏庚右衛門入道学心諫早伝五郎入道了頑 行れも長刀名こと
外に同心荒海左衛門尉 北国方の本庄北条伝兵衛の勢の中へ乱入て戦ふ 山
本入道九ヶ所疵とうけ此時柿崎和泉守家に薪田与三兵衛 吉江喜四郎 川田弥
兵衛 坂本源八 八方より捨て突掛り 動動とつき崩し 首ハ坂本源八
山本が帰宅に入道の首敵に渡さんハ笑ふべしと十人ばかり金棒に縋
迄戦ひ仕舞首取て元の所へ立帰るこの中に大仏源早衛人の法師首
あり 彼を無常相ハ変て何と動動と分られ是故に一人 鞭を弱く
相乗り胴に首と合て見るに実の首所に動めく水沢の川端に一つに埋ける

其後溝水を川に流し山崩れ昔の塚ハ今の川中なり寛永の比芝村と云る畑ふ
塚をつき又甲州流の学士原氏石碑を芝村弥陀堂の庭に立まく迚き比云る畑
ふ碑を立千丈の松あり曰

其身雖没有不没者其身雖朽有不朽者嗚呼道鬼也哉

初鹿野源五帝戦死の場所ありて塚あり又小沼田の内八幡宮の傍に七太刀三太刀と
ふ所あり此地信玄鎌倉信玉會の場所なり又西軍勢討死の首塚数塚有古ハ
数多有しゝ田畑に発て今僅に拙あり傍田村の東に狐塚と云有小笠原信濃守
を塚ゝ所と云八幡の道の傍に一条石出羽左夫信龍の塚と云あり

山本勘助晴幸遺物鉄笏之圖　　松代藩中小幡氏家藏



存養天下鰥寡孤獨　晴幸　△

所愛者有罪必罰所憎者有功必賞　△

如此両面に彫ツケアリ

芦荻集

河中為とりに民の家に秋収ちとて為墓をらふ車おそろしく為しるる
ぐのこゝ忍敵の為ちをあ
敵をふく其のあれ為たてあつ東ぐるの風乃ちをき手　真顔

バカ火

河中為の為にバカ火をふくあり三月九日より翌月登に出る小面ある彩き
最多く小松原村と分邑の旦の原の同り出る者の火の如くちらくと飛樓に
燃て迫くとき夢と抗されハ近く事喧嘩するをハ忽消く遥原ふに三ツ

ロッヨヘヘ又一ツヨリテ燒ルヨウ

李華綱目野燐火人及牛馬兵死者血入土年久所化

皆精靈之極也其色青狀如炬或聚或散来逼奪人精氣

高井郡之部

保科

保科八高井郡々名之内の一ヨリて今七村あり保科七郷ヨリ

保科盛衰記云寛永二年五月加賀國越中境俱利加羅岳源平對陣伝説

名畫名堂百對陣又東鑑ヨ元暦元年七月十日保科右京亮朝光屬

ヨリ云ヘ此保科ヲ京ヨリ八大系図ヨ井上ヲ忠長ヲ名乗ヨリ又曰文治

三年二月二品三浦介義澄ヲ亭ヨ招テ郢曲ヲ聽ヲ時保科冠者の招女の長

所の為ニ舞ヲ奏ヲ今の彼招女と云容貌あり其舞踏後ヨ絶あり云ヘ

京都南禪寺の開山大明国師同妙心寺の開山関山国師ハ此保科の産ヨリ

本国ヨリ四国師英産あり其中二国師八此地ヨリ出ルしヲ奇ヘ所謂四国師

○法燈国師 元亨釋書云名覚心姓八常澄信濃ヨ神林郷ノ人云ヘ

永仁六年化筑紫ノ那神林の産ヨリ○大明国師名普門号無関延宝伝燈

録云京兆南禪寺無関普門国師姓源氏信濃保科ノ人云ヘ東福寺聖一国師の

法嗣弘安三年渡海ニ応中版翔同四年冬化第八十号ニ仏心禪師○関山国師名

慧玄延宝録云京兆妙心寺開山惠玄国師世姓源氏信濃英産ヨリ

妙心寺の記ヨハ信濃保科ヨ梨の孫ヨ有ヨリ紫雲ヨ住寺の大燈国師の法

嗣延文ヨ年冬寂八十四勅賜仏心覚照禪師賜諡本有国成国師○矩庵

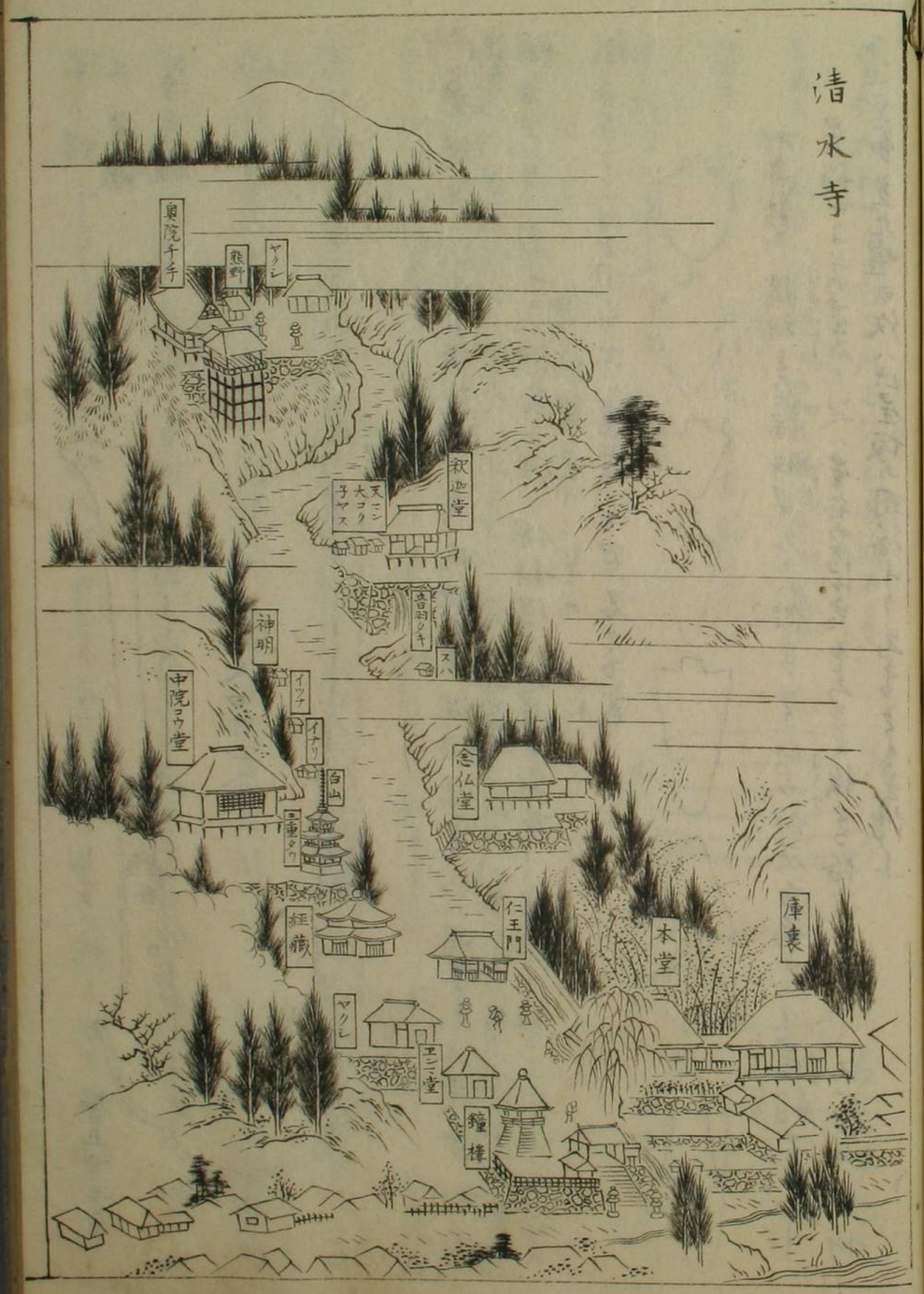
南院国師同録云名祖国姓不詳信濃長池ノ人仏光国師の法嗣南禪

寺の二世也長池ハ水内郡ヨ在

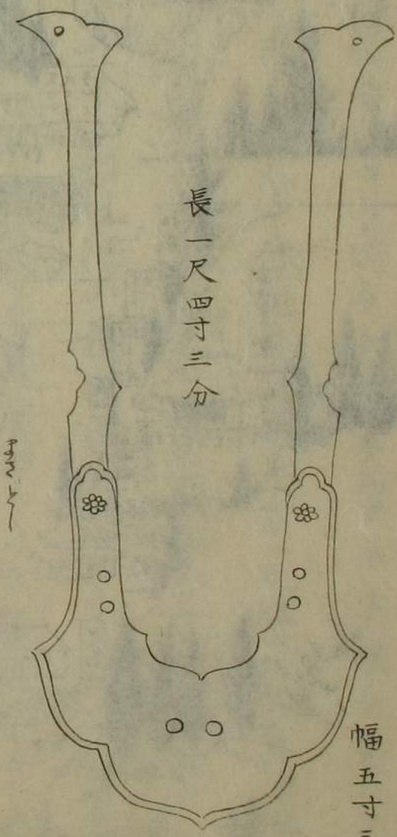
此地の清水寺ハ京都の清水寺とは同じとて、本尊千手観音長八尺、其古
き物なり堂ハ乃田村丸の建立なりと伝記ニ曰桓武帝延暦二十年田村将軍
東国征討の時願心ニ因て大同元年當山ニ七棟の殿堂三層塔三十余ヶ所
神社三十三の伽舎を建立て阿弥陀山護国院清水寺とあつけ許多の田
山を供修の資縁とす其後兵火に焼滅して今ハ存する
所三堂あり奥院 観音堂 千手大士 中院 講堂 胎蔵 大日四天 三重塔 金剛大日 四方四佛 見るべき作
其所堂二ヶ所 閻ヶ堂 経蔵 念仏堂 釈迦堂十箇の小祠等ハ後ニ建立
する所なり 云々

此観音堂ニとゝ八所権現の小祠あり其内ニ古き鏡形の如き物三枚あり
何時の頃ふう二枚ハ失てなし・今一枚あり清水寺の庫中ニ蔵ス

清水寺



其質鐵
薄而輕



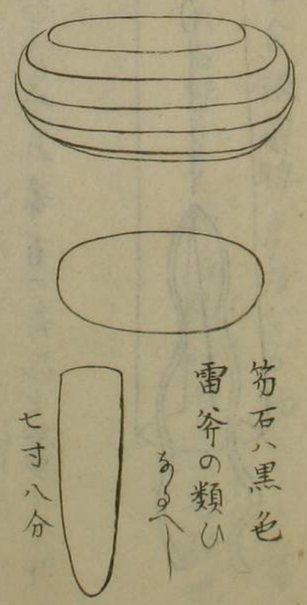
○廣德寺ハ國昔山佛陀院と号延徳元年保科孫四郎利の開基先住梵賢和尚
擬石と多く都ち」俚言ニ往古保科孫四郎正忠星と射蔵ー星墳と等く以東ニ辺ニ
擬石あり云ふ因く古ハ星宮も星名も書ーと云

和名鈔ニハ穂科と有保科星石ニハ假字あり山石擬ニ白色ふして星鉾石の如ー
星鉾ー名ニ星石とハ書宮の偽字たるきて後ニ俗説ニ又一説ニ保科
家立九曜の紋ハ此星塚の因縁より出るとも云ふ

黒土坂神社の宝物ニ瓜石筋石圓餅石と
三石あり瓜石ハ形越瓜の如く黄白ーて焼き
筋あり肌清ーて潤沢有り黒筋ハ
真物なもまれ

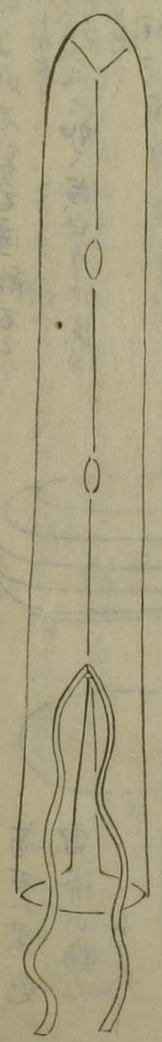
松皮琴ノ嚢

須坂の老臣駒沢氏ハ清泉と号ー平日琴ノ書ニ樂んー倦ず所義ニ松皮の琴嚢
あり此物ハ山田と云る所ニ出るー其地ハ極山中ふて耕作の地ー少く農民多くハ山ニ入松
木を取て業ニす宝ニ歳千束ニ経ーても志あぬ松の老木あり立本十七囲有ー夕日
枯ーー甚大木ありとー云ふ材木ニハ見ずして短く切ー新て屋の葺板ニ販
へーと松人五六人催ー其地ニ小屋と造ーひ居てこれを切る皮ニ櫛と同ニ色
白く軟ニーて哆囉紙の如く草のごとくなる物あり是を焼く丸て席物ニ又ハ



筋石ハ黒色
雷斧の類ひ

頭を被て風雨を凌きなどとなり数月を地に住居して後終れハ家に埋む時
は物皆腐稀なるハなるなれども久しく埋り置て後五年ばかりなる頃氏人なる少
なる杉皮を敷なるに皆腐朽て埋し者ハ一枚とかし悉この切端の有しを
元集く所へ爾一エノ人命して琴の裏を縫しむエノ人少船来の獣皮をもつて
らしを杉皮なるゆゑと少大きなる孤をもこれに千束の奇調なりと感賞した
りとなり異民しも京都の蒲山大坂の第一眼堂江戸の居會こゑ物となく曰
千束を縫し義業杉の天然ありとハ少なるもなるハ今の初なり朝
鮮の樺皮と大同小異なり暖皮と稱て冥々しるべ帝有の奇品と賞しなり



東都の桂川氏ハられるこて實ハ天下の絶品金銀威物まて及ばる物なりと賞
しなりとなん此裏を入置ハの琴なりと又宋朝の古琴なれ勿論斷紋あり牛毛斷也
斷文ハ漆の剛痕なり云

一目髑髏

須坂の普願寺の近辺小一箇の塚あり上ハ櫟の朽る株ありて其下と穿たり
ハ奇なる髑髏ひとつ出て両眼の痕ハ穴なく形ありて完ハあるず其中ハ小き穴数
あり額ハ○如此の穴一つあり是眼の跡なるべし尖りなる骨数こあり栄螺め
ごとく数多の御夫怪物なりとて去砕人とせしを寺僧えこハ鬼類の死なる
しとて管ハ収て庫中ハ秘し容易人ハ見せず文化十二年五月こ地ハ遊
ひ田中氏の許ハて密ハえなり上覧のあり鋒骨簇ことして最もあり
き物なり若かるなるあらいなる禍をなるなきあるあるある

出雲風土記ニ曰昔或人大原郡阿用郷作ル山田ヲ于時目一鬼食佃之男所食男云阿欲〻〻故ニ曰阿欲神亀三年改字書阿用

米子瀑布

須坂より米子一里半此所より山まいり谷川と沿りて行こと三里ばかりにして数百丈の嶮巖峙る蒼天より直ち流るる大瀑二筒あり此滝の禁厳二三丁をへだてて声を抗呉ときハ忽滝水雨のごとく降来るこれを逆し吹ども同じく声を挙ひて絶衣ひるがへる送り風と云南の方ハ不動滝とて高さ九十丈北の方ハ権現滝とて高さ七十丈ばかり何れも岩壁とそびえ巌下る其音山谷をひびき夏日の天凄冷として肌膚粟こうり二瀑の間一丁程隔る滝の右に不動堂あり常ハ人蹟なし六月十三日より十五日まで諸人参詣を立人ハ自負て那智の滝也兄とあがめいとうまことに奇絶の瀑布ふりさけ見

果てしなく此の山中あれハ六月の外人ハ稀し

又此所岩燕云〻〻不動堂の形端に逗留ふく巣をひてあり又滝のあたりの岩壁に巣多し水烟の中と飛揺る事珍ぶ常の燕より少し大きく

て腹に黒点あり図のごとく白燕あり

此米子より硫黄を出す名産あり硫黄ハ毒の目とりとるとて不可なり 粽の日より見え消く

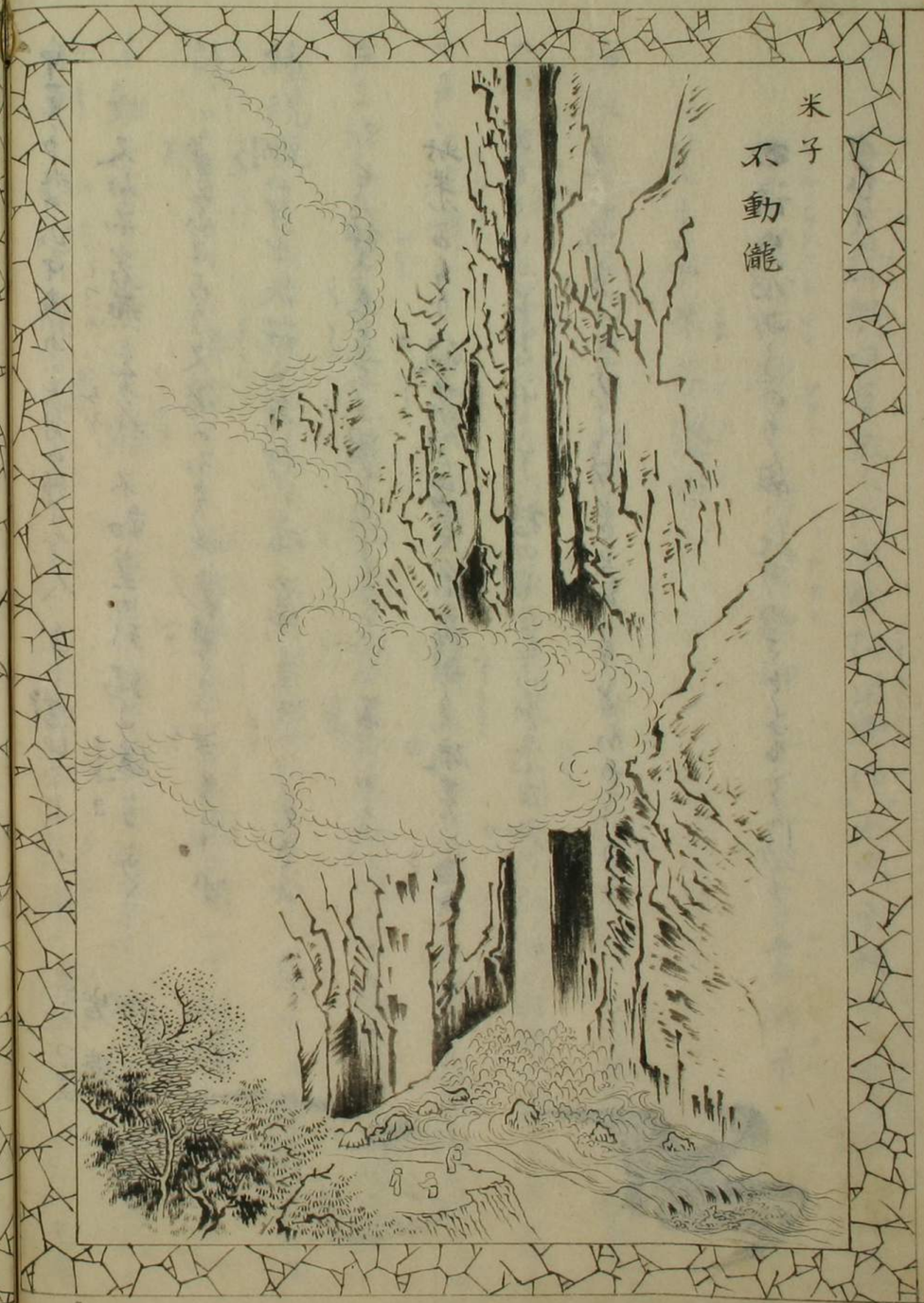
色山吹なりて少〻ほりさ乾るとわかるく

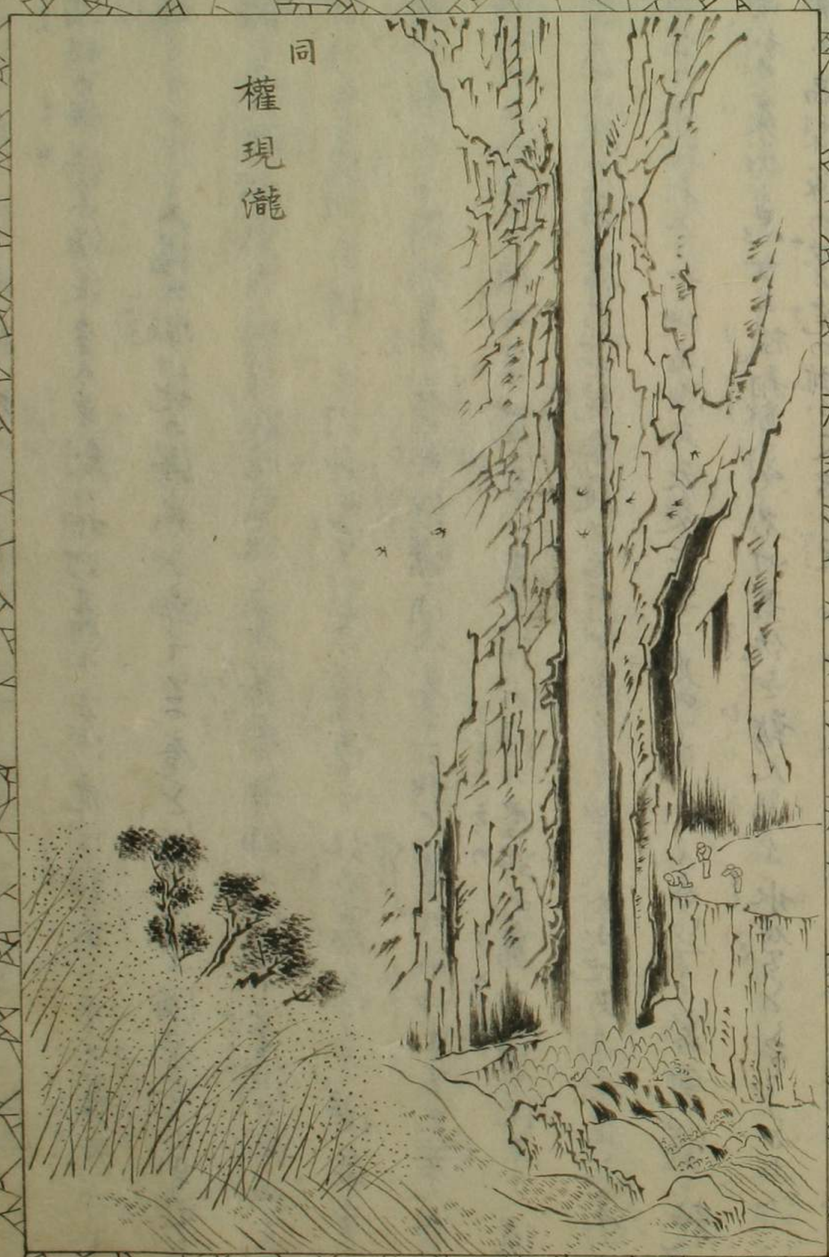
ふるるや

和歌の詞みゝのちゐあらためのさとるほり

なひて云〻

岩燕


米子
不動滝


同
權現滝

無縫塔

湯村の横湯山温泉寺の草創は相伝嘉元三年虎関禅師上条の善應寺より撰揚して田中に入湯の假屋地の湯泉と尋て茅庵を繕ひ浴し温泉寺と号す

諸宗の僧侶代々住て塔弘治二年節香禅師入院して曹洞の宗流となり禅師を鼻祖とせしかの門外小星川と云ふ流ありて乱石石磯落々温泉寺の住職入寂近き時は自然石の無縫塔流れ来るこれを墓所の印とすること代々住持の石塔寺の後山より十四五町ばかり立て山川の源は杏野の奥大沼の池より流れ出る山中より岩倉大沼琵琶池の三所を本として四十八の小池あり永正三年龍蛇出て水乾し今七池あり又天文七年八月の頃より岩倉池の龍蛇高梨家の息女に懸想して石叶其他を難んず水災と成て土俗いひ傳へ高梨家の第宅の跡は中野の東山の麓にあり大沼は往十四五丁寺より小池まで四里余あり流れ来る石塔住僧の意に叶ざるとき人夫をして山下へ送れば又のごとく石流れ来る云伝へ今は石流来るときは住持陽居あらしむ北城河内谷の湯谷寺もあるなり

さて此の山際は谷を堀て温泉出る多し材裏に数箇の湯槽あり人家は内湯あり寺の浴室に温泉あり常に諸所より湯治の人絶せず脈一り又此所より十四五丁許流て谷へ入て温泉の吹出る所あり荒井河原の六地獄と云ふ筥吹地獄と云ふ岩穴数ヶ所あり湯の湧出る音笛の吹かしく又小塙の地獄と云ふは金中に湯の熱き如し小便地獄と云ふは穴許に細く沟通る土砂飛沫絶なし赤湯と云ふ名あり無の池と云ふは池の小流の地獄芙山肥前の雲仙岳の温泉多く出る池水の沸騰る色を以て其名あり此地の地獄と云ふこれを倣て名づけ又三四丁を隔て大地獄と云ふは

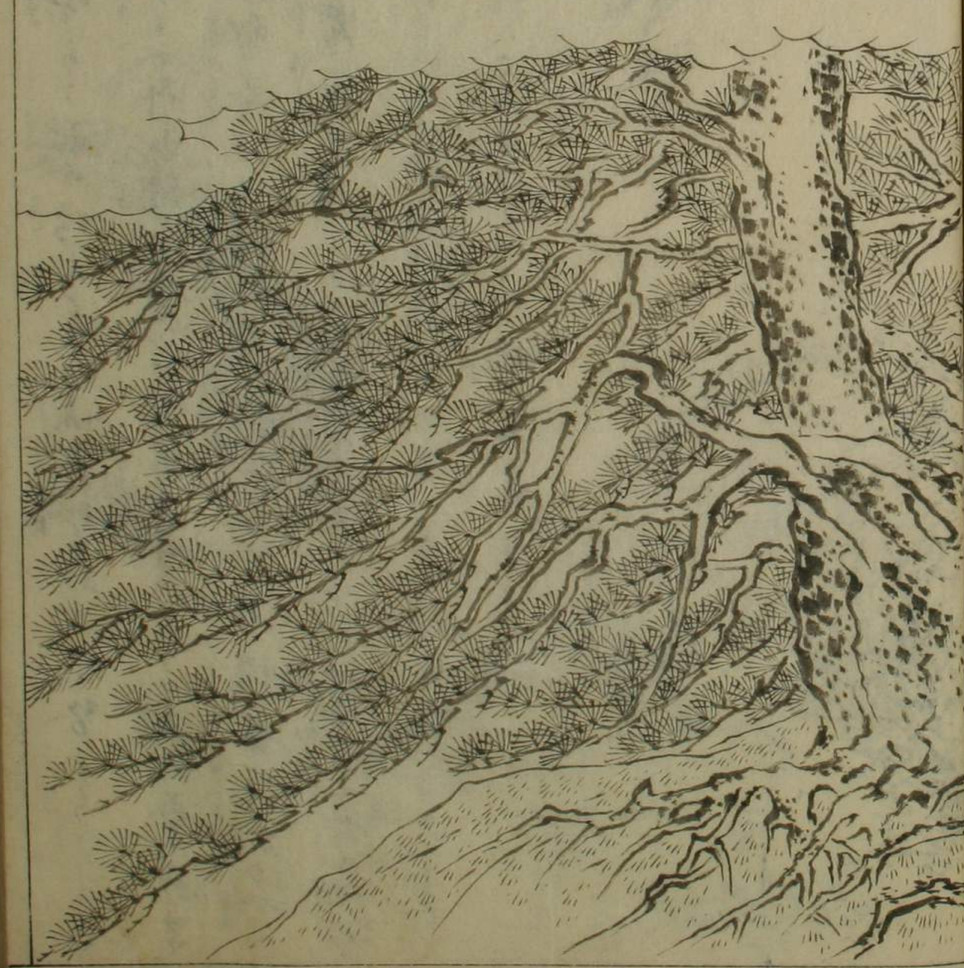
飯盛松

大熊の里

大圓寺（曹洞宗）の後背乃山の尾崎ゝ老松あり根本四尺ばかりゝ數本ゝ分れて枝葉ちりくもびこり東西の谷ゝ垂さがりて徑二十五間と云上ハ高く栄え枝〻飯櫃ゝ延びめぐりて

壮観いふばかりなし

其状飯を盛たる如くなれハとて俗ゝ飯櫃松と称ス



溪流の側より噴噀り水の吹るとき、流水和ず故ゑ碧ゆるくして
六尺ばかり吹るゆゑ一丈余ゆるるあり又人あまあまて
手を拍ゆくときハ水勢益強く湧出く二丈ばかりく沸騰泉元湯の如く
ちりぢりに其音地を震蕩て凄しき光景ふるり又大沼の池の辺に大の池樹
ゆゑ池より常ゆゑあるたあるい池中硫黄の臭つよく泥水熟るゆごとき上
に枯茅をかさねたゆゑ焼るゆ奇なり

彌勒石

渋の下田中の川金倉といふ所の北端山の梯下よりさき五尺許横三尺余の石面に佛像を刻みて
彌勒石と云多年風雨に濡れて文字半ハ湮滅せり温泉寺の記に大治五年極月十日と有
今ハ石上に小堂を立て風雨をふせぐ

惣長地上より五尺五寸
面長二尺二寸余
手長一尺三寸 往七寸五分
横三尺七寸
一万字三寸四分

大治五年より文政十一年迄
七百年

雌垂雄垂

木嶋の上山根まゝて部屋といふ里あり此地に岩石峙る渕ありこれを雄垂と云
又そこより三間ばかり南に流る渕を雌垂と云

小菅

小菅山権現の神祠八東嶺の中腹にあり此辺浅葉野と云里祠八小菅村にあり此辺浅葉野と云ふ和泉武蔵国入間郡に又松本の北小浅葉野と云る地あり　小菅八神古菅に麻葉の御名あり

出る名あや近来里祠に万葉の人麿の哥と碑石に彫て立

一万葉巻三　浅葉野立神古菅根惻隠誰故吾不恋　柿本人麿

祠司傳記曰此御神八白鳳年中に諸人始て知る神躰八素盞嗚尊なり其後役行者此地に来り熊野金峰白山山王立山走湯戸隠等の神を併祭て八所権現と稱せ後ち行基菩薩参籠ありあり平城天皇大同元年北狄退治の願として神地を建立あり社頭建立後建久八年頼朝卿より庄園あまた寄附有近御六ヶ所と云今に隣村に神戸の名残とて小見の里八神地にあり古くより此神始に云ふ附彼里に休ふて今に帳祇あり其後一宇を立て加耶吉利堂と云ふ故に小見を俗称の地と云て七邑八すべて教生を禁ず又国祖あ椿を栽る事を禁ず奥院八別当大聖院元隆寺里祠八神主鷲尾氏

其後貞和四年国禄に係り又弘治三年焼却の後社頭古に復せしと云ふ例祭八六月四日より十一日まて其間市をなして諸所の商人輻輳農家をうて器財衣服の舗を開け八日頃八寂くして僻地に忽繁花の街となり往還絡繹たり雑沓置莚を播き地方官所ハ出張の有司幕の内に座して非常を改め其辺の山里又八遠く出羽奥州より多馬多くひき連まりて交易貢買多き邑賑しく恰も大都会の如し六日八日八相撲日にて諸方の力士集ひあり吾こそ今の抽手にと肩いかり腕まくりして勇ましく又目覚し六月四日安原寺村八惣祭　一の宮居より三十七丁の間に七石八木と稱するあり

まく見に図し

七石八　鏡石　蚫石　御座石　鐙石　尾張石　大黒石　隠石

此木黄葉ノ時ニ至レハ四里程
遠ノ迫ミエルナリ平日ニハミエス

神戸
鴨脚木

八木八　五本杉　鞍掛杉　鳥居杉　太平杉　連理杉　腰掛杉　實取杉　乳木

此乳木とゝふハ銀杏にて一山を陰く神戸にあり希代の古樹にてうさハ餘木に秀るとい一ゝもたきに迫りてハゝゝ四ハ十一拱にあまり枝葉繁茂して枝ごとに瘤れかきものと生す長く下り垂るハ乳の如し故に乳木とあつくを最長するものハ地に入ゝ九き柱と立てるゝゝ地に届るハ又枝葉と生じ珍奇の神木なり

凹石

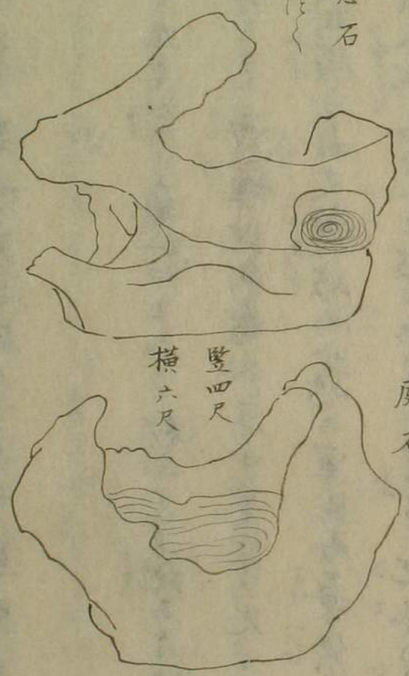
七卷村と東大滝村の間千隈川端の石ハ大なる石ごとに窪みあり小なるハ其辺の盥盤ゝゝ去ゝ今ハ大石のみ殘りて石屑曲して穴の通りるあり数ゝ穴孔ゝのあるもあり変化さまゝ

窪田氏の家ハ土地に近き故小様ゝの石を引取て庭に作る一ゝとして穴孔あきハゝゝれも珍石なり

凹石

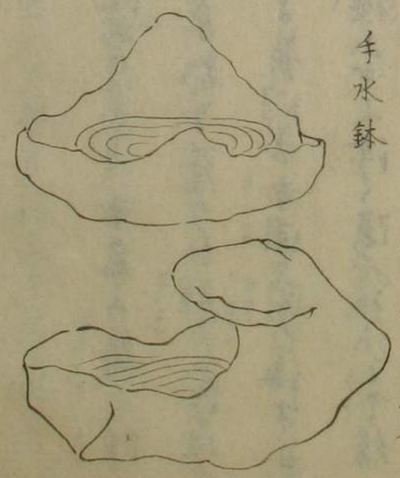
小見木鳥氏庭石

神ノ窓石と名ぶゝ



七卷観音堂庭石

中村川口氏手水鉢



藤沢窪田氏庭石

獅子石

此地の川向ひ西大滝の藤沢竜津淵の神祠の鳥居の通れるにて千曲川の水中に獅子石あり早魃の年ハ水をゝく涸るゝ時ハ氏左右より仰ひ

金て頭目鼻口自然ふ獅子の勢をなす但金毛を生ぜざるのみ三十年ゟ一度俗
云ふ所なり石色深碧なりと云り

賈此誌録ニ曰賛公平泉莊ニ有リ獅子石
其形宛如ニ獅子ノ首尾鼻眼皆全シ云云

秋山

箕作より九里余り南山中ゟ入る秋山と云ふ地あり此所ハいまゝ平家の落人隠
れ住む所と云ふ西遊記ゟ寿永年中平家の人々京都を落ち須戸の城
を義経ゟ攻られ又讃岐の八嶋の軍ゟ去負終ゟ長門壇赤間ヶ関の海中ゟ
一門ゟ入水ゟ漂ふと被云ふ其内実ハ肥後の極山中ゟ深く隠れ住ひ後
世は皆源氏ゟ攻て平家の人々ハ山中の土と成果てゝ隠れ住ひ所
肥後国今五ヶ村と云ふ年月ハ凡そ四五百年ゟ間一向人ゟの通路ゝ無て居
たりしゟ足利の末ゟ川ゟ流れ来るを見て人住ゟ山奥ゟ人住ゟ
ゟ聞ゟ聞ゟ世ゟ通ずるとゝ云ふ秋山も同く平家の残党この
山中ゟ忍び入て住ゟ故ゟ昆商と成今ゟ平の字を名乗ゟつくるの名ゟ山地南ハ
上野北ハ越後の山々連りて何処ゟ通路ゟ無し箕作の下志久見の川を信
越の分界とす又北越ゟ清津川あり山ゟ川の中ゟ流ハ信濃
信濃ゟ出る川の端ゟ深く窪ゟある地ゟ家居ゟ入口の所ゟ云ふ所人
の初て住ゟ所ゟ云ふ所より次第ゟ開墾して川上に上聖京和山ゟ云ふ村あり
二里上りて幕山の南ゟ温泉あり近き頃小屋を作りて湯ゟ入ゟ七八月の比ハ
入浴の人ゟ故ゟ通路ゟ開て牛ゟ馬ゟ通ゟ難ゟ嶮岨の山路ゟ川下
ゟ通りて小赤沢耳酒秋山ゟ云ふ四里程の間ゟ過ゟ大赤沢山地ゟ下ハ北越ゟ
中平佐東菊倉今訛て云ふ村ゟ秋山ゟ云ふ住古ハ五穀ゟ

あくにハ葛葉もちを作りて之根を食ひ今ハ山くの岨を焼き焼畑ひ栗稗蕎麦大豆等を作り又ハ柿の実を拾ひて食らす中ニも栗を第一の食とす故ニや正月七日ハ稗そたゝあり男根の形を造り今年の栗ハ如斯と家毎ニ打祝て祝言すといへり近き比より北越ニ効ひて綿と業とを素ふ衣類ハおろとふ布あて造るなり物ハ山中ニ自然ニ生て苧の如くニして苧を苅て日ニ晒し水ニつけて皮を剥小家ニて細ニ編袖ニ成外套の如くニして表着と成若男女孫子まで皆これを着る名ばけてバタとふ冬ハ古袴のとく着夏ハ裸形ニこれをなり著るなり

野苧 和名 イヌカラムシ 俗ヨロロト云

花アカ紫

按ニバタとふハ巴旦人の著る物ニ似る故ニ号る也 萬国新話ニ曰巴旦大寛の南ニ当りて天竺ニ近き角ニ延宝八年五月十七日の夜日向の国ヘ十八人家の男女船ニ乗て天竺ニ送り翌月十八日伊豆出雲寺辺より清陽ニ送る則鎮臺牛込忠左衛門殿屋敷ニ而問せらるゝと雖ども言葉通ぜず何国の人名知れさるしら山家種苗子入役水野小左衛門と云もの女ニ成まてやくやく巴旦人なるよ知れり衣類ハ日本の風呂敷の如くニ成家の砌ニ成り木綿布ニ成あくられ残られハ残らず袋ニ成き神仏の御ニ制して著せしとなり云国を云ふ秋山の人のバタと著たるに似たり

刀剣などハ世ニ珍しき物ニ成しかみる商人ニ賣低く賣そぶしとなん小刀ハ障子ニ成て蓙と下て風を防く笠席ハ茅の如くニ成る物を編て志くなり

髮を油をぬるゆゑ常ハ細きものを巻て結ぶ男ハ多く星を出す故に頭
ゆ低垂ぶ女同志の噺ハ急言ひてひとえきをふと謂きをえへきぶちを
或人菌を多く採りをるを見るに見ハいろる菌ぞと問るハとちのちのかちの
ちの根よりてちくちのこと云ひを見る多言ふ故に苔の物るゆ
又地疱瘡をいろるを見て見しに黒き疱瘡流行ときハ商人修行者の類と
ハ見ハ毎家を問訪する者ハ其乳を染脳て来ると怖てゆ功徳院
宝ゆる寺有と云ふ行程ゆ六月涼室の頃ハさらゆ平日とくも
人死るゆ死ハ僧を請ふ及ハ一堂内ゆ往古より三幅の画像ありて是を
死人ゆ裁ちと引導通俗の代りとせ画像一ツハ弘陀佛一ツハ聖徳太子一ツ
ハ六宗僧とゆ寺の住僧ハ何ぞ次ゆ訪のゆゆ今ハ中野の地
方官所の管内と成て箕作の村長奉て諸ゆを指揮をゆ

ゆと望まゆれハ求ることを微く衣食事足りて慨ゆ争ひ怒ゆるゆく只質朴ゆ
して大古の人の如しはゆた世外の一世界ゆゆ自然天ゆ楽しし朱陳村
ゆ似ゆて但田ゆき故ゆ米ゆ求ゆき故ゆ酒ゆきを不足とするの婚姻
を外余儀ゆく酒を用ゆきゆの有ときハ栗の醴を造りて用ゆ又一月ゆ一度の
祭を神棚へゆるゆ小家ハ一年ゆ二三度を上る是ハ太神宮へ献ゆるゆ数十
年ゆ多り其数ゆりて四五百度ゆ満ゆるといへ共一銭ゆ教ゆず伊勢の使ありと
いへ共跳て送られたゆく伊勢ゆ祇吏廻村のゆあれハ男女ゆをひて珠
数をつまゆり合掌頂礼して拝ゆを導ゆ太神宮ゆ詣ゆるのゆゆゆと多く栗酒の習を
いたくゆゆと生涯の規模とゆゆゆゆゆゆゆゆ

按ゆ建仁元年ゆ後ゆて城太郎資盛二平氏の残党を招き多坂の城ゆたてこ
ゆり據て謀叛を企ゆ様倉ゆ討ゆゆて佐々木盛綱入ゆ弛ゆひ合戦ゆ

及び絶壑を攀ぢ坂を攀ぢ城郭を逐電し其時忍び入りあらんも図り難し幽谷
餘韻と秋山記あり平勝秀と云者頼朝の為と破れ上州草津に敗走
して事々あれハ未詳

秋山記

千丈實巖

信州高井郡有鳥甲山傳云往古法道仙人修練之地也及後文治年
間平勝秀為頼朝破従上州草津望此山於西北敗走乃止其
麓今之屋敷村乃其所棲遑處時其親戚近臣僅可十人潜跡
竄伏今之秋山村即其裔也蓋勝秀以秋山為氏故名
其地乎其地有高倉山越後謙信居春日山蠶食其地方若
干里時秋山村人獲二鷹於高倉山以獻謙信謙信賞之
為除百石之租最後松平遠江刺史守飯山時信越有經界諍南
北若干里東西若干里永為信州之地距秋山村於北數里有箕作
村總轄秋山諸村故謙信除書亦賜箕作彼官裁定經界
後秋山諸村並為箕作島田氏佃戸蓋島田氏祖嘗與秋山氏
有婚姻誼是以奕世屬之乎皆常慶院檀越而各平字冠名
由先祖平氏也八十年前秋山出金島田氏以其金鑄鴟鐘以簾常
慶院今現存矣其後金斷而温泉湧金氣也惜以其路嶮難曾
無遠人来浴今茲癸丑夏五月島田氏特白中野官衙蒙之允愈
且得廳吏某氏陰助欲以闢一區勝地乃命力夫割石穿山以浚其
泓且架数棟於巉巖間以便遊客特請藥師佛而造之堂號
曰金峯山寶巌寺從此沿川而下纔一里所東崖有村名曰和山
亦有温泉俗云冷湯其性亦良也島田氏修之架屋搆堂如秋山

焉名曰和合山瑠璃光寺常慶抵書詰有稱述余也未遊之境
妄意思之如其所謂大倉嶽大巖助笠之勢地能々倉鉢保釜池
村名平雁沢白沢作沢戟山等皆山巒奇秀固亡論也況復温泉之
凝滑也冷湯之清澈也鳥甲之白巖也赤倉之丹崖也菅神之祠也
矢櫃之瀑也獄坑也風穴也雄竈也雌竈也宮城秋山和山上原山村
溪邑鮮少幽邃使我不覚神馳魂飛安得身生羽翼一食頃
周旋其地以一覽其千巖萬壑邪徒有老矣之歎乎竊愧
無神通遊戲振錫躡空之三昧耳下畧

山蟹

秋山の山陰に大蟹あり山蟹といふ人の語りしとて中甩の六尺ばかり
なるが頭を上る四五尺ばかり尾の方ル三尺ばかり曳て逃早く走り行くと山蟹
の大きさ丈二尺ばかりなるが蟹の如くかけりて遁げまゐる人
殺るき者の毛いよ立てうさぶるまでもいとふるこをみるる密よ見めぐて行をきくし
樹蔭を穴掘ひるれハ巖の峙を下り到りて蛇迫る者ハ逆よ蟹を捕
らる蟹ハ一の挾をもて他の挾をもて一の挾ハ五寸ばかりよ挾切て食ひとる人
見ハ北越山で数人の語を聞しに行れの説ハ遺もびと洞源山の老僧祖始
和尚ハ物語りき　西国の沢蟹といふも二三尺ばかり大餘よ知ると
いふれハ同物ならや

天保六未年九月

信州臼田

井出道貞著

信濃奇區一覽巻之五　大尾